

海外  
論文 &  
レポート

# 排除を許さないために ： 協同組合企業の役割 <2>

グレッグ・マクラウド 著 / 中川雄一郎 訳 (協同総研 / 明治大学)

---

---

本論は *From Mondragon to America* (日本語訳『協同組合企業とコミュニティ』日本経済評論社、2000年)の著者であるグレッグ・マクラウド教授(Professor Greg Macleod)が、2003年5月28日 - 5月31日にカナダのヴィクトリア大学において開催されたICA国際協同組合研究会議 (Mapping Co-operative Studies in the New Millennium; International Congress, University of Victoria, Canada)で行なった研究報告論文です(彼自身の報告は5月31日)。マクラウド教授は、本論が日本の協同組合関係者に「協同組合と企業」について考察していただく機会となればと考え、私にそれを翻訳するよう依頼してきました(5回にわたる連載となります)。本論は21世紀における「協同組合企業」の社会的役割が何であるかを解りやすく論じており、協同組合運動に関わっている人たちにとって大いに有益であると思います。なお、原文タイトルは *Co-operative Corporations As a Response to Exclusion* です。

---

---

## 言い古された2重のディレンマ

現在われわれが直面している問題を考察する際に、レッセ-フェール政策下の資本主義がもたらす弊害に対抗する人間主義的な運動内部の分裂についてより注意深く回想してみることが有益である。19世紀の60年代に(キリスト教社会主義者などの)改革者たちとCWS(イギリス協同組合卸売連合会)との間である議論が始まった。両陣営の人たちは共に献身的な人たちであったし、彼らの長期目標は同じであると思われた「すべての人に豊かな生活を」という目標で

ある。彼らは似たような言葉を使っていたが、その用語の理解は異なっていた。表面的には、あたかもそれは単に手段の選択の違いであるかのように見えたが、しかし、実際には、より複雑な、より錯綜した側面がそれにはあったのであるから、少しく言及しておこう。というのは、用語の理解の相異は、社会的目的に献身する組織にあっては現在でもしばしば対立の原因になるからである。

この問題は、古くはアリストテレスも認識していた問題であった。彼は、われわれがわれわれ自身や社会を理解できるようにす

る知識と、われわれがわれわれを取り囲む世間の物事を行なうことができるような知識とをはっきり区別した。前者の知識は「何故」(why)と問う知識であり、後者の知識は「どのようにして」(how)と尋ねる知識である。アリストテレスにとって、知識は技法(techne)とphronesisを含んでいた。ところが、近代人は物を生産する技術的知識しか受け入れなかった。それらは再生可能な、あるいは反復可能なシステムである。科学技術は、過去において習得された科学的な技術を繰り返す方法論として理解されるようになる。これらの技術は、機械がそれに基礎を置いている形式によって表現される。わが現代の科学技術主導のシステムにあっては、他の人たちや社会との関係にインパクトをもたらすphronesisのための空間はまったく存在しないのである。

アリストテレスは論法を類別した。彼にとって、理論的な思考とは、一般的な理念に関係するものであり、また体系的な方法によるそれとの組合せに関係するものであって、他方、実践的な思考とは、物事を実行することに関係し、個々の事例を扱うものであった。アリストテレスは、物質界においては2つの事例がまったく同一であることはあり得ない、と認識していたので、実践的な状態にあって物事の相違や差異を区別し、識別することを可能にするのが慎重さの長所であるとした。このレベルでは、現実の世界で意思決定がなされるや、直感や直観的洞察力さえもが働き始めるのである。実践的な意思決定は理論的な三段論法(演繹法)の結果ではないのである。

この区別、識別は人びとを両極端に分かたせてしまうかもしれない。一方の極には純粋理論の立場から行動する改革者たち

各事例の特殊な事実や識別すべき事実の考察を拒否する狂信者がいることになる。彼らは、人間の人格や地方のコミュニティに忠誠を誓うのではなく、一般的な原理や理念に忠誠を誓うのである。そして他方の極には実践のレベルでしか常に活動しない人たちがいることになる。彼らは、通例、一般的に望ましい目標を達成しないので、彼らの事業は結局のところ、何よりもその事業を支援した人たちの目的を打ち挫いてしまうのである。基本的な哲学的区別などは遊びの次元でしかない。理解することが理論的理性であり、事を行なうのが実践的理性であるのだから、理論的理性と実践的理性は明らかに関連している、という程度なのである。純粋なプラグマティストは、舵のない船のようになるのであって、長期的な目的についてのどんな明瞭な意識もなく状況の変化に押し流されるのである。

新しい経済における知識の求心性は、恐ろしい武器とみなされるかも知れないし、あるいは事業の倫理的な方向を求める新しい機会とみなされるかもしれない。だが、それが武器とみなされるか、新しい機会とみなされるかは、まったくもって知識についてのわれわれのコンセプトに左右されるのである。古典的な論理や古典的な知識は幅広くかつ人間主義的であった。現代的な論理や現代的な知識は狭隘になり、還元主義的\*になってしまった。アリストテレスの論理は生活経験に基礎を置いていた。すなわち、それは、生活から引き出されたものであり、また生活の指針となり得るものであった。それは専断的ではなく、相対的なものであった。19世紀の末になるとウィーン学派\*の論理がイギリスの思想家たちを支配し、やがてその流派が今日の経済学の1つの主

流となっていく (Ayer, 1936) それはルールのあるゲームとして人間の精神によって創造される自己充足の論理である。科学の論理は日常生活の論理から超然とすることになっていった。超然としてこの科学の論理とアリストテレスの生活の論理を統一しようとの試みもなされたが、成功しなかった。C.P. スノーはその結果生じた二元性を2つの深刻な敵対的文化と評している (Snow, 1959)。

成功のうちに発展しているモンドラゴン協同組合企業体の創設者のドン・ホセ・マリア・アリスメンディアリエタは、フランコ將軍によって指導されたファシストの攻撃と戦っているスペイン共和国政府軍を援助するためにやって来た社会主義者たちによって編成された義勇兵旅団のイデオロギー闘争の無益さについて苦々しく回想している。アリスメンディアリエタは、社会主義たちの旅団は終わることのない理論的な論争を続け、その拳句に分裂してしまったのであるから、あまり役に立たなかったのに対して、ファシストを支援したナチスは非常に優勢な武器技術により強力な破壊力を発揮した、と思い巡らしたことがあった。ナチスの戦闘機が共和国政府軍の多くを壊滅状態に追いつめたのである。彼は、民主的な共和主義者の敗北をかなりの程度まで理論的な口論や論争のせいにした。彼にとって、それは、理論と実践との分裂のこの上ない実例であったのである (Macleod, 1997)。

近年、これと同じような問題について論じている評論家がいる。ハーバーマスである (1984)。彼は手段的目標と倫理的目標を区別する。したがって、彼は、ある1つの問題を2つの非常に異なる方法によって理解する。ハーバーマスは、あらゆる社会には2

つの側面があって、異なる種類の理性によって区別される、と主張する。すなわち、一方は「生活世界」と呼ばれるもので、文化的再生、社会的統合それに社会化という過程を伴うのであるが、このような過程は、彼が伝達的理性と呼んでいるものから生じる。問題や目標について議論や討論がなされるので、主要な決定が告げ知らされるようになる。

他方の側面は「システム」である。近代国家の経済システムと行政システムを生み出すのがこの種の論法である。各「システム」は貨幣や生産性として表れされるような操舵メカニズムによって処理され、治められる。それは手段としての理性に基づいて機能するのである。彼は、20世紀にあっては手段としての理性が伝達としての理性を大きく凌駕した、と述べている (Reed)。すなわち、西側世界は「どのように (how)」という疑問に答えるのは上手になったのに、「どうして (why)」という疑問にはほとんど関心をもたなくなったのがこの20世紀である、ということなのである。

このチャレンジは2つの種類の合理性を尊重することになる。すなわち、

- (1) 資本主義の合理性：この場合、物事を捉える観点は手段主義である。唯一の理性は実際的である。それは、仕事を行ない、販売を増やし、株式の価値を高める、等々である。
- (2) 倫理の合理性：この場合、物事を捉える観点は価値の観点からの行動である。それは、われわれの行動はわれわれ個人間の関係に、コミュニティとの関係に、将来における社会の維持可能性、等々にどのように影響するのか、というものである。

振り返ってみると、CWSは実際的な目標に関心を払い、それに対して、改革者たちは倫理的な目標に関心を払ったように思える。CWSのリーダーたちは、彼らの事業が生き残り、拡大することを欲した。彼らは、貧しいことが普通であった顧客たる消費者のニーズに応える立場をとったのである。これは短期的な利益を達成しようとするものであるが、それに対して、改革者たちはもっとずっと大きな観点で物事を考えていたのであり、長期的な社会変革を目指したのである。

われわれがこの問題をどのように理解しようとも、それはコミュニティの開発あるいは地域の開発に関係している人たちにとっては現実的な問題なのである。開発は、ある人たちにとっては生産性や財源に関わるものであり、他の人たちにとっては重要な価値をもつ人間としての選択の機会を増やすことも含んだもっと幅広いものである(UNDP\*\*\*, 1991)。識字率や平均寿命といった諸要素を含んだ「人的開発指標」(Reed, 2002)というものが筆者の手許にあるが、その指標の解説や分析が何であれ重要なことは、開発現場に積極的に関わっている人たちは、「開発」についての理解に大きな差異のあることを認識している、ということである。

そのそもその原因とは関係なく、そこには「企業の責任・義務」か「社会的責任・義務」か、というディレンマが存在する。この相違は、ある場合には、一人の人間のなかに見いだされるし、またある場合には、1つのグループが2つの陣営に分裂してしまうことに見いだされる。理想主義が優勢な陣営とプラグマティズムが優勢な陣営とへの分裂である。そして、一方の側には改革者たちが

いる。世界銀行が会合を開くと必ずやって来る多くのデモ参加者に代表される人たちである。他方の側にはOECD(経済協力開発機構)の前チーフ・エコノミストのデイヴィッド・ヘンダーソンのようなシカゴ学派の面々がいる。彼らは、人びとがその日々のパンを得るのは、パン屋の慈善心によってではなく、利潤(?)を求めるパン屋の強い欲求によってである、と旧来の主張を繰り返している。

ジェーン・ジェイコブズ(2001)は、すべての人間は「狩猟者」と「飼育者」に、すなわち、「狩猟者」と「農業者」という2つのグループに分かたれる、と示唆している。彼女の小説では、狩猟者は企業家的マネジャーになる傾向があり、農業者は官僚的管理者になる傾向があるとされている。またパトリシア・ピッチャー(1995)は、現代の事業経営を詳しく分析した本のなかで、マネジャーには「未来予見的マネジャー」・「職人技能的マネジャー」・「専門技術者のマネジャー」という3つのタイプがある、と論じている。

未来予見的マネジャーは、価値や理想によって鼓舞され、より明るい将来に期待をかけるが、しかし、あまりに实际的でないことがしばしば見られる。職人技能的マネジャーは、ビジョンを生産とサービス産出の具体的で実際的なシステムに変換する能力がある。最後に、専門技術者のマネジャーは、ルールブックに従って事を行ない、そのシステムを繰り返し、広げることができる人である。専門技術者マネジャーには既存のものを再生産する傾向があるので、進取の気性や独創力を発揮することはない。未来予見的マネジャーと専門技術者のマネジャーは、通常は、協力して進むことはしな



い。ピッチャーはこう言っている。多くの大規模で成功する事業を始めるのは未来予見のマネジャーであるが、結局のところ、それらの事業をコントロールするようになるのは専門技術マネジャーである、と。彼女は、専門技術者マネジャーを、変化や改善に抵抗する利己的な官僚主義をつくりだす者だとみなすのであるが、このような区別は協同組合企業だけでなく資本主義企業にも当て嵌めることができるのである。

本論は心理学あるいは社会学に関する論文を書こうとするものではない。そうではなく、心理学的要因や社会的要因は事業の成功を妨げたり、あるいは反対に容易にしたりすることがあるし、またあり得るのだということに注意することが重要である、と本論は経済開発に積極的に関わっている人たちに示唆したいのである。貧困や一般的に見られる排除は大きな問題であると考え人たちにとって、またそのような問題についてわれわれは何事かを行なう倫理的義務を負っているのだと考えるわれわれにとって現在は、協同組合の事業体だけでなく事業体一般を再概念化するのに適った時期である。この過程は過去の経験、法的な必要条件、それに今日見られる実業界の現状に基づかなければならない。

(訳者注)

\* 「還元主義」は生命現象を物理学的、化学的に説明し得るとする主張である。

\*\* ウィーン学派は「限界革命」を理論化したカール・メンガーを祖とする一連の経済学者集団の呼称である。第1世代としては、メンガー、第2世代としてはベーム・バヴェルク、ヴィーザー、第3世代としてはハイエクなどの人物がいる。主としてオーストリア出身の経済学者によって構成された学派であることから、一般にはオーストリア学派と呼ばれている。なお、シュンペーターはこの学派にあって独自の位置を占めている、といわれている(経済学史学会編『経済思想史辞典』を参照)。

\*\*\* United Nations Development Programme (国連開発計画)

